

## 危機と変革のなかの大学生協

大学生協連会長理事 庄司 興吉

### まえおき

遠いところ、お集まりいただき有難うございました。また、鹿児島大学および九州事業連合の皆様には、さまざまなご準備をいただき有難うございます。

先ほど、鹿児島大生協の幹旋で鹿児島大学の学長先生とお会いすることができました。お医者様で、乳がんなどをご専門にされ、深く広い病理学をご専門にされている先生のようなです。鹿児島大学の地域性を生かして、これからの新しい大学の行き方を考えていらっしゃる、食の問題、島嶼地域の問題、病院も含めて街中にある大学のあり方についていろいろおっしゃっていました。お話のなかで、大学生協と一緒にできそうなことがいろいろ出てきたので、協同・協力・自立・参加の大学生協も大学の発展のために一緒にやっていきたいのでよろしく、と申し上げておきました。たいへん気さくな良い先生でした。今後とも、鹿児島大学を中心に良い関係を築いていきたいと思います。

私のほうは、いま本を作っていて、直前まで編著『地球市民学を創る：地球社会の危機と変革のなかで』の校正と索引づくりをしていました。ゲラを編集者に渡し、16時前に羽田に着き、ラウンジで挨拶について考え始めましたが、すぐにはまとまらず、飛行機のなかでもやや茫然としていました。

### 挨拶の起源

鹿児島に着いて、可児島先生とお話し、可児島先生のご先祖が鹿児島出身であると伺いました。大藩にいじめられて、治水のために動員され、その後鹿児島の一字を変えて生き延びてこられたのがご先祖だと伺いました。可児島というのはそういった苗字なのだそうです。たいへん勉強になりました。

そういう話をお伺いして、私が会長理事になった経過を思い出しました。4年前のことになります。何気なく、副会長だからたいしたことではないといわれて引き受けたのですが、すぐ3月には広島で会議がありました。それは参加できなかったのですが、8月に金沢で会議があり、田中会長のお母様がなくなられたために代わりに司会をとということで引き受けました。そのあと、田中前会長理事に後任を引き受けさせられ、このようなことになっています。

同年12月の総会の後、1月の理事会で、隣の和田専務に「なにか一言を!」と言われて挨拶を始めたのが運の尽きで、田中前会長は別に何も「挨拶」的なことはしてらっしゃらなかったと思います。しかし、一度はじめると、このような会議のたびにお話をさせていただくことになり、その時どきで、大学生協が直面している課題について、多少なりとも意味のあることを言わなければという気分にもなっていました。

### 社会学の応用から生協論へ

長いあいだ具体的な「応用」の機会に恵まれなかった私の社会学ですが、やってきたことはただの「空論」ではないと主張してきたつもりですから、大学生協についてもなにか言えるはずだという思いもあって、そのつど何か意味のあることを言おうと努力してきました。それらを録音してもらって、手直しして蓄積してきた「言説」の量は、今やかなりのものになっています。そのうち息切れするだろうと周りの方も思っており、自分でもそう思うのですが、例えば昨日は酒を飲んで寝てしまったのですが、早朝目が覚めて、いややまだまだ言うことはあると思って、メモを作成したしだいです。

あとで和田専務から報告があると思いますが、今年に入って山口大の問題とコープイン渋谷の問題が発生しました。それらのことを聞いたので、1月の理事会では急遽話題を変更し、それらに関わる話をさせていただいています。和田専務からあとで詳細な報告があるはずですが、私がそのとき申し上げた内容に沿って、コープイン渋谷のほうも何とか解決の見通しが立ってきているようです。専従職員の頑張りに感謝しなければならないでしょう。山口大のほうも、まだまだ曲折はあるかと思いますが、どうやら最初の一方的通告を受け入れず、われわれの意見を聞いてもらう方向で収束の見通しが立ってきているようです。

この間、生協総研が、三年前に生協論の「現状分析編」と「理論編」の2冊を刊行しているので、その続きで「現代生協論の探究：新たなステップをめざして」という企画を進めてきています。それに今、何か書くとしたら何だろうかと考えているのですが、その内容が1月の理事会で繰り延べした「自分の身体で考える！」の内容と重なってきますので、そのことを今日はお話ししたいと思います。

### グローバルな経済情勢をどうとらえるか？

1つは、昨年度後半から急速に悪化して世界に広がってきた経済危機の問題です。金融危機から経済危機へと深化しつつグローバル化してきたわけですが、それをどうとらえたらよいか。私は経済学者ではありませんので、経済学者とは違っているとらえ方になると思います。昨年来、「マルクスの見直し」や『蟹工船』のバカ売れなどの現象が起こっています。そういうことで喜んでいるレベルではどうにもならないので、深刻な危機を新しい時代の現れとしてどうとらえたらよいか、あらためて考える必要があるのではないかと思うのです。

20世紀は社会主義革命の世紀でもあり、ロシアで起こった革命が、国家社会主義の肥大化という形で途上国へも波及していきました。中国での革命の成功が1949年、キューバでゲリラが政権を奪取するのが1959年です。その後、キューバ型の革命をラテンアメリカに広めようとしたゲバラの試みが成功せず、1970年にはチリに合法的に社会主義政権ができるのですが、4年後に軍部のクーデタによって倒されたのが1973年の9.11です。9.11はこういうふうにも二重の意味を持っている。その後、ヴェトナムが長い戦争をつうじて1975年にアメリカに勝利しました。1978年、中国が改革開放に踏み切りましたが、ヴェトナムとうまくいず、1979年には北側から軍を侵入させるということにもなりました。このあたりが、20世紀社会主義の限界だったのではないのでしょうか。

同じ年の1979年、イギリスでサッチャー政権が成立します。アメリカでは、その翌年の大統領選挙でレーガンが当選し、1981年にレーガン政権が成立します。日本では翌1982年に、中曽根康弘政権が成立する。英、米、日におけるこれらの政権の成立によって、新自由主義が急速に世界に広がっていきます。

### 新自由主義とは何か？

新自由主義とは何か。この頃すでに、アメリカのブレジンスキーのような人は、ソ連はもう長く持たないと見通して、当時の私にはにわかには信じられなかったのですが、結果的には彼の見通しはあたりました。彼らが、国家社会主義の行き詰まりを見越して、ケインズ主義を放棄し、市場原理主義を取り始めるのです。市場原理主義とは、基本的には、われわれの経済活動をはじめとする社会活動には未知数があまりにも多すぎるので、コントロールするよりは市場自体の動きに任せたほうが良いという考え方です。オーストリーのハイエクに学んだシカゴ大学のM.フリードマンが、それを前提にして通貨の操作で経済をコントロールするという理論を展開するわけですが、それがいわゆるマネタリズムです。市場での自動調整を前提にして、貨幣の供給量を調整することによって資本主義本来の活

力を引き出す。これがいわゆる新自由主義でした。

1989年、中国で天安門事件が起こり、これを契機に、改革開放のあとの方向に進むかが非常にはっきりしてきました。いわゆる「市場社会主義」の方向です。市場社会主義というのは、要するに政治体制は社会主義時代以来のものをそのまま残すけれども、経済は外資をどんどん投入し、資本主義とまったく変わらないように成長を続けていく、ということです。それがその後の経過ではっきりしてきました。

その後、東欧が崩壊し、ソ連は消滅します。日本はこの間にバブルに突入し、やがてそれがはじけて、失われた10年が20年にもなりそうな感じになっていく。そういう状態のまま、昨年来の金融危機、経済危機に巻き込まれてきているのです。

### **資本主義は元に戻っただけなのか？**

これらのことをどう考えるかということでしょう。20世紀に起こった社会主義革命は、資本主義世界システムの発展の過程で起こった一つの事件にすぎない、と近代世界システム論を展開してきたウオーラステインは最初から言っていました。結果的には、そういった見方のおりになった。そのかぎりでは、資本主義が元に戻り、ほんらいの矛盾を表したのが昨年後半以降の危機なのだというのは事実ですが、そう言って喜んでいるだけではどうにもならないので、これを新しい事態としてどう捉えるかということです。

最近必要があって「国際労働者協会創立宣言」、つまり1864年にマルクスが第一インターを作るときに書いた宣言を読み直しました。また、この第一インターを基盤にして労働者が活動しているうちに、フランスとプロイセンの戦争があり、その余波で1871年にパリ・コミューンが起こるわけですが、それについてマルクスが書いたのが「フランスの内乱」。これも、必要があって読み直しました。とくに「フランスの内乱」などは、良くここまで細かいデータを集めてきて事態を分析しているなど、今読んでも思います。当時は新聞しかなかったわけですから、それにくわえて第一インターのメンバーから口コミなどをつうじて得た情報をもとに、マルクスは書いているのです。

その頃からおよそ140年経っていることとなります。この間に何が起こったのかきちんと捉えておかないと、資本主義がまた元に戻って矛盾が出てきたのだという話だけではすまないのです。

### **市民民主主義の普及**

一つには、資本主義諸国を中心に普通選挙が普及して、一人一票制の民主主義が定着してきました。制度ができてから数十年にはなるのですが、この制度を当たり前のように思っている人たちの眼からみると、思ったよりも新しく、できてから思ったほどの年数もたっていない。古い、新しい、両方の見方ができると思います。重要なことはこの間、選挙でどの政権でも選択できる時代になったはずなのに、労働者たちは必ずしも単純に社会主義などを選択してきていないということでしょう。

原因の一つは、ソ連東欧や中国が実際にどういう社会であったのか、ということが反面教師としての役割を果たしてきていること。もう一つは、イギリスの労働党、ヨーロッパの社会民主主義政党、その他いろいろな社会主義政党が混迷を繰り返してきていること、です。普通選挙をつうじて市民多数の支持を得、議会政治をつうじて社会を変えていく政党のあり方があらためて問われている、ということでしょう。

### **二段階の情報革命**

もう一つは、第二次世界大戦後に情報革命が進展したということです。大きく二段階に分かれるのですが、第一段階では、テレビの普及、電話の普及、コンピュータの開発と普及が進みました。1960年代に、アメリカの公民権運動に端を発してヴェトナム反戦運動に

展開した社会運動が、ヨーロッパや日本にも波及しただけでなく、一部社会主義国にも波及した。その結果として、ヨーロッパには現代思想が登場してきます。アメリカではこういう高級な思想の展開はあまりなかったのですが、その代わりにコンピュータを使いやすくしてネットワーク化していくという動きが起きました。これが電子情報革命あるいはコンピュータ革命の実態です。逆にいうと、コンピュータ革命を起こした人たちは、1960年代の社会運動の影響を受けた人たちから出ているのです。

それを踏まえて、電子情報革命の第二段階が1980年代から90年代にかけて起こりました。衛星放送が普及し、ケーブルテレビが普及し、両者が結びついてネットワーク化されていきます。マスメディアが完全にグローバルになり、世界中のテレビに世界中のニュースが同時に映るようになってくる。さらにいま地デジ化が進められていますが、これが進むとマスメディアが全面的にデジタル化されることとなります。

他方、パソコンが普及し、ネットワーク化されることをつうじて、インターネットの利用が広がりました。今やインターネットに乗れないものは無化されつつあります。無化とは、サルトルが『存在と無』という本のなかで使ったジャーゴンですが、『存在と無』や『弁証法的理性批判』も含めて、インターネットに載らないものはないも同然という状態になりつつある。

### グローバル情報社会の積極面

そういう形で、いわばグローバル情報社会がはっきりとできてきました。テレビとインターネットが結びつき、マルチメディア化が進んできており、そこに金融危機も経済危機も映し出されるようになってきています。同時に、危機を踏まえて起こった変革の動きも映し出されている。その点が、19世紀はもとより、1920年代から30年代にかけて起こった危機とも根本的に違うところでしょう。皆が事態の進展を見ているので、当時起こったようなことが必ずしも起こっていない。かつては、自分の預けている銀行の預金はどうなるか分からないと、どっと銀行に押しかけたりしたのですが、今は、人びとがすべてを見ていて、政府などもそれを意識した対応をしているので、そういうことが必ずしもすぐには起こらない。その点の違いを、見ておかなければなりません。

もちろん、メディアには映し出されていないものも多く、そのほうに重要な意味があると感じる人が多くなれば、そういう思いがたまっていってどこかで暴発する可能性もあります。ただ私は、メディアは必ずしも、かつて考えられたほど権力に操作されているばかりではないのではないかと、思っています。パブリック・アクセスという言葉がはやってきていますが、市民たちが自発的に発信したものが、メディアに乗って広がってそれなりに社会を変えていくという面も出てきている。そういう状態を踏まえて、新自由主義破綻以降の時代をどう考えるか、議論していかななくてはならないでしょう。

### グローバルな政治情勢をどうとらえるか？

今の事態について、基本的に二つのことを申し上げました。二つの意味で、19世紀はもとより20世紀とも、今ははっきり違った段階にあるのです。一つには、主要資本主義諸国から一部の新興国インドのような国までを含めて、市民民主主義が広がってきていて、選挙制度で自分たちの政権を選ぶシステムが定着してきている。二つには、そういう選択をするときの判断材料を得るためのメディアが、完全にグローバルになって定着してきつつある。その二つです。

それを踏まえて実際に起こっていることですが、昨年の9月以降、各国政府が協調して金融危機を深刻化させないようにしようとする努力が世界に広がってきています。新自由主義ではやはりだめなのだということが分かかってきて、はっきり自分の過ちを認め、やり方を変えなければいけないという経済学者まで日本には出てきている。ある種のケインズ

主義的政府が経済に介入しなければ経済危機は回避できない、という見方が世界に広まってきたのです。

しかも、1920年代30年代、あるいは第二次大戦後50年代60年代とは違って、それが政府間連携を強調するという形で出てきています。それぞれの国の政府が中心になって、自分の国の経済を中心に考えて、ブロック化していく方向には必ずしも進んでいない。グローバルなレベルで、地球的にコントロールしようとする動きが広まっていて、私はこれを、ケインズ主義は復活しつつあるのだけれど、政府間関係をつうじて、国際的な形で復活してきつつあるので、ある種の国際ケインズ主義 **International Keynesianism** が現れて来つつあるのではないか、と思っています。

### 属性革命の重要性

さらにそのなかで、世界の諸政府の一部から大きな転換が起こりつつある。その最たるものは、アメリカから起こった動きで、私はこれを属性革命 **Ascription Revolution** と呼んできました。**Ascription** というのは、男性であるか、女性であるか、黒人であるか、白人であるか、高年齢であるか、若年齢であるかというような、自分自身ではコントロールできない人間の属性のことです。この500年間、近代世界システムはヨーロッパ出自の白人男性に牛耳られてきた。それにたいして、とくに20世紀の後半以降、いろいろな反対運動が展開されてきた。その一部が、ほぼ半世紀かけて、アメリカで実現したのです。

アメリカの昨年の大統領選挙では、民主党の黒人の候補が白人の副大統領候補と組んで大統領に選出された。共和党の候補も、考えてみれば高齢であったし、選挙作戦の意味もあって女性を副大統領に選んでいた。そういう意味でも、全体として属性革命の意味が非常に強い選挙だったということが出来ます。

先ほど1960年代の社会運動といいましたが、それが70年代に入って沈静化してしまったように見えたので、私は70年代の後半にアメリカに留学し、それがどこに行ってしまったのかを研究しました。車その他でアメリカ中を駆け回り、いろいろな大学でいろいろな先生に合って、話を聞いた。運動には浮き沈みがあるのが当たり前で、運動の掲げた目標はそんなに簡単に実現できるものではないが、そう簡単に消えてしまうものでもないだろう、などいろいろな意見がありました。

### 深層からの本当の変革

その後数年前に、カルフォルニアのバークレーでロバート・ベラーという人に会いました。社会学の世界では非常に大きな意味を持っている人の一人で、第二次世界大戦直後には一時アメリカ共産党の活動にコミットしていたという経歴の持ち主ですが、パーソンズの弟子で、『トクガワ・レリジョン』という徳川時代の宗教にかんする研究で有名な人です。その人が、1980年代90年代のアメリカを見ていて、アメリカで起こっている「良い社会」を求める動きや、「心の習慣」という、唯物論的な考え方をする経済学者から見たら「何だそれ」というようなものをおして、アメリカ社会の変容の方向を探ろうとしてきた。その人はその時、ブッシュが再選されたときでもあり、次の大統領選挙までろくなことはないだろうという見通しもあって、アメリカの状態にかんして非常に絶望的な考え方をしていました。

それに乗ってか、昨年の大統領選挙も、アメリカではまだまだ黒人が大統領に選ばれたりはいらないだろうという見方もありました。日本人で言うと、かつてNHKの記者だった日高義樹氏は、6月頃の時点で次期大統領はマケインだと予想していました。その彼は、大統領選挙で予想と反対の結果が出たので、それについて今度はアメリカ人は間違った選択をしたという本を出している。そういう日高氏などの予想に反する動きが、深層から、半世紀あまりかけて実現してきたわけなので、私は、本当の変革の動きがようやく始まっ

ただ、と見ていいと思っています。

もちろん、今後の展望が甘くないのは事実です。黒人の大統領が、これから4年間のあいだにどれくらいのことのできるのか、甘い見方は許されないでしょう。ただ、彼は例えば、環境問題がらみでグリーン・ニューディール **Green New Deal** ということ言っている。ブッシュ政権下でアメリカが一貫して環境問題に冷淡な行動を取ってきたのにたいして、オバマがそれを変えて、環境対策をつうじて雇用を創出するという政策を打ち出し、それを環境だけではなく医療などにも広げようとしているわけですから、その今後は注目してみていかなければならないだろうと思います。

### 革命の意味の革命

そういう意味であえて言うと、われわれは、革命をフランス革命やロシア革命のイメージで考えている。けれどもそういう革命のイメージそのものを革命するのが本当の革命なので、そういうことが今まさに起こりつつあるのです。140年前の第一インターやパリ・コミューン、90年前のロシア革命、60年前の中国革命、40年前の五月革命、という具合に並べてみると、革命という言葉の意味そのものが変わっていくことが本当の革命なのだということが分かるはずで、古いイメージにとらわれていると、今起こりつつあることの本当の意味が分からず、とらえそこなってしまう危険性があるのです。

そういう意味で、市民民主主義の普及とグローバル情報化のなかで、主要国家間の大戦争はまず不可能になったと考えてよいでしょう。そういう見方は、最近の中国の軍事費の伸びなどをみていると、甘いかもしれません。しかし私はあえて、基本的には不可能になったと言いたいと思います。

それを前提に、われわれも、国際ケインズ主義に絡んでいく。そのために、少しでもましな政府をつくっていく。そして、グリーン・ニューディールを拡張していく。先ほどの例でいうと、日本などでは高齢者が非常に多くなって超高齢社会になってきているので、それを例えばシルヴァー・ニューディールに拡張していくことが考えられます。さらには、今の不況では日本だけでも手一杯だということかもしれませんが、途上国はもっともっと大変なわけで、途上国の現状をふまえて、開発援助に絡ませながら雇用創出も考えていく開発援助ニューディール、もっと言えば、世界各地で起こる紛争——基本的なのはパレスチナで続いている紛争ですが——などに絡ませて、そういう問題の解決を雇用の創出につなげていく工夫、つまり紛争解決ニューディールなども積極的に考えていくことが必要になってくるのではないかと思います。

### 労働組合から協同組合へ

そのためにどういう方式が必要になってくるかということですが、労働組合がシステム内化してしまっているのです、協同組合があらためて大きな意味を持つてくるのではないのでしょうか。先ほど言及した「フランスの内乱」などを見ていると、マルクスは、当時労働者のあいだで起こっていた協同組合の動きに比較的頻繁に言及しています。

柄谷行人が『世界共和国へ』（岩波新書、2006年）という本を出しています。そのなかで、プルドン主義とマルクス主義とは基本的に共通していたのだ、資本主義の問題を克服していくために国家権力を創出するのではないやり方でやっていくという方向性では、プルドンとマルクスは共通していたのだ、ということを行っています。マルクスは若い頃に『哲学の貧困』というプルドン批判を書いていますので、プルドンとは相容れないものだと思っている人が少なくありません。また、ルイ・オーギュスト・ブランキという一生の半分以上を監獄で過ごした社会主義者、何かというと労働者の蜂起を唱える社会主義者がパリ・コミューンにも絡んでいたのだ、かれをマルクスが批判しているという面からも、プルドン主義とマルクス主義とは別のものだというのがオーソドクスな見方で

した。しかし実際には、内容的に共通したものがあつたというのです。

マルクスが、当時のイギリスの労働者が選挙権獲得のことばかり考えていて、本来の運動に力を入れないことに不満を持っていたことは事実です。労働者の選挙権獲得運動が、19世紀から20世紀にかけて、市民民主主義をつくっていくうえで大きな貢献をしたことは事実ですが、労働者は生産者であると同時に消費者でもあるわけなので、その両面からする協同組合の運動も重要であつた。プルドンの思想は、そういう労働者たちの協同を各地に沢山つくりだして行って、それらを連合させていくというモデルでした。協同主義のことをプルドンは相互主義すなわちミュージャリズムと言っていますが、ミュージャリズムの単位をたくさんつくって行って、それらを連合させていくという連合主義すなわちフェデラリズムのやり方が、彼の考えた社会変革のモデルでした。柄谷は、そういう形で社会を変えていくことを考えていたという点では、マルクスとプルドンは共通していたのだと言っているのです。

### 戦後の歴史をふまえた協同組合と生協

欧米では第二次大戦後、各種協同組合がいろいろな形で伸びています。スペインのモンドラゴンの例はいうまでもありませんが、ICAがシンガポール総会をやる前の年に出した「グローバル300」を見ると、日本の生協や農協も入っていて、全体として世界経済のなかで相当な重みをもっている。2004年段階で世界第9位のカナダのGDPを超える供給高を示しているということですから、大変なものです。ただし、生協にかぎっていうと、イギリスでは、サッチャリズムによる労働組合の解体と並行してだんだん力を持たなくなってきた。大学でも生協はできない。かろうじてフェア・トレードをつうじて、一部の生協が力を盛り返してきているという程度です。

ヨーロッパ大陸では、ドイツで、テンニースという社会学者が、20世紀のはじめに『ゲマンシャフトとゲゼンシャフト』という本の第二版を出し、ゲマンシャフトとゲゼンシャフトの矛盾を乗り越えていくのは協同組合すなわちゲノッセンシャフトであろうと言った。ドイツ語で、ゲノッセは仲間という意味ですので、ゲノッセンシャフトはいわば仲間社会です。そういう協同組合の理念が、1919年のワイマール憲法の内容にもかなり盛り込まれています。しかしその後、第二次世界大戦があり、戦後の西ドイツでは国家の社会国家化にともない、生協的なものの多くを国家が吸収してしまったために、ドイツをはじめとしてヨーロッパでは今は、生協は目立たない存在になっています。

### 日本の大学生協と都市生協

そういうことを考えると、日本では、第二次世界大戦後に大学生協が広がり、他方賀川豊彦の系譜で都市生協も神戸生協をはじめとして広まって、大学生協から優れた活動家が地域生協に出て行って、数十年のあいだに巨大な生活協同組合の集合をつくりあげていったという歴史があります。この歴史を、世界史的な文脈のなかで位置づけていくことをつうじて、今世界に広がりつつある世界的な危機を、一部に起こってきた変革的な動きにつなげながらどう乗り越えていくかを考えていかなければならない。そういう方向で、生協のあり方も見直していかなければならないのではないかと思います。

大学生協の動きもそういうことに関連づけて、強化する方向に持っていけないかと思っていて、生協総研の論文を書くときにもそういうことがいえないかと思っています。そういう文脈で日本の生協はユニークな過去を持っていて、大学生協はそれに重要な貢献をしてきている。そのことをわれわれはあらためて考えて、大学生協もいろいろな問題に直面しているわけですが、それらを乗り越えて今後の発展を考えていかななくてはならないのではないかと思います。

(090306 地域センター会長会議での問題提起、090824 完成)